

次の文章は、森沢明夫『おいしくて泣くとき』の一節です。これを読み、後の問いに答えなさい。ただし、【】は省略した部分の説明、「Ⅱ」は出題者による注です。

【中学三年生の心也（俺）と夕花は、幼なじみであり、クラスメイトでもありません。クラスの話し合いで、なかば強引に学級新聞制作する係を押し付けられた二人は、自分たちに「ひま部」と名づけ、活動を始めました。】

夕花にボタンを付けてもらった翌日は、朝から抜けるような青空が広がり、東の空にマツチョな入道雲が湧き立っていた。蟬たちも無駄に元気で、登校時間の気温はすでに三〇度を超えていた。でも、今朝のテレビの天気予報によると、これからどんどん空模様は変わっていく、午後になると台風の影響が出はじめるらしい。

真夏のまぶしい朝日のなか、俺は通学路の坂道を登り、校門を通り抜けた。汗ばんだ背中にワイシャツがべったりと張り付く。体育館の前を過ぎ、昨日、夕花が俺を見下ろしていた教室のベランダを見上げた。そこには声を上げてふざけあう三人の男子のクラスメイトたちの姿があった。

昇降口に入ると、少しホツとした。強烈な日差しから逃れられたからだ。スニーカーから履き替えるとき、俺はちらりと夕花の下駄箱を見た。ひとつだけ扉が凹んでいるから、見つけるのがとても簡単な下駄箱だった。

いかにも頭の悪そうな汚い文字で、でかでかと、そう書かれていた。

「……………」

一瞬、言葉を失ってしまった俺を、周囲のクラスメイトたちが黙って見ていた。

俺の脳裏には、石村とその取り巻きの顔がちらついていた。怒りなのか、悔しさなのか、恥ずかしさなのか、自分でもよく分からないけれど、とにかく真つ黒でドロドロとした感情が肚のなかで渦巻いていることだけは分かった。

動揺を隠したくて、俺は指先でそつと落書きをこすりながら口を開いた。

「ふざけんよ。これ油性じゃんか」

せつかく明るめの声で言ったのに、クラスメイトたちは、それぞれ顔を見合いながら押し黙っていた。

重めの沈黙を破ってくれたのは、いつもはきはきしている女子バスケ部の才女、江南だった。

「それ、書いた犯人のことは誰も見てないけど——、でも、みんな、石村くんじゃないかって……………」

まあ、普通は、そう思うだろうな……………」

俺は、それには答えず「ふう」と大きなため息をこぼすと、肩にかけていたカバンを床の上に置き、椅子に腰掛けた。そして、筆箱から消しゴムを取り出し、落書きの上から力任せにこすってみた。

上履きに履き替えた俺は、階段を上り、いつものように教室に入った。

その「異変」に気づいたのは、親しい友人たちに「おーっす」と手を挙げながら自分の席に向かおうとしたときのことだった。どういいうけか俺の席の周りに数人のクラスメイトたちが集まっていた、机を見下ろしていたのだ。

夕花は、その輪には加わらず、斜め前の自分の席で静かに本を読んでいた。へたに後ろを振り向いて余計なことを言ったりしたら、それがまたいじめの火種になるということを夕花はよく知っているのだ。

俺は嫌な予感を抱きながら、彼らの輪に近づいていった。

「あ……………」

最初に俺に気づいたのは、サッカー部のお調子者、青井だった。その青井の様子に気づいた他のクラスメイトたちが、一斉にこちらを振り向いた。

微妙な緊張と好奇心が入り混じったいくつもの顔。

「お前ら、何してんの？」

①「イセイを装いながら、俺は、みんなが見下ろしていた自分の机を見た。

嫌な予感はハズレた。より、悪い方に。

俺の机の天板に、太い油性ペンで落書きがされていたのだ。

偽善者のムスコ

でも、油性ペンで書かれた文字は、少し色が薄くなっただけで、ほとんど消えてくれなかった。

「消しゴムじゃ無理だよ、油性なんだから」江南が横から口を出してくる。「ねえ、風間くん、職員室に行つて、ヤジさんにシンナーと雑巾を借りてくれば？」

「おつ、それはグッドアイデア。なんなら俺、一緒に行つてやろうか？」

目の奥に好奇心を光らせた青井が言う。

「大丈夫。俺、一人で行つてくるわ」

消しゴムを筆箱に戻し、俺はおもむろに立ち上がると、②ヤジウマたちを押しつけるようにして輪の外へと出た。

職員室に行くには、階段を降りて一階に行き、屋根付きの渡り廊下を通つて、隣の校舎の二階に上がらなくてはいけない。

俺はぐらつく膝に注意しつつ、手すりにつかまって階段を降りはじめた。降りながら、ふと、昨日の石村の少し丸まった背中を思い出した。

「くそっ」

また、偽善者呼ばわりかよ——。

俺の人生のなかに「偽善者」という三文字が放り込まれるようになったのは、父が「こども飯」サービスを始めた三年ほど前からだった。といつても、そのほとんどは俺個人への批判としてはなく、いつも『大衆食堂かさま』か、その店主である父に向けて放たれた三文字だった。

正直、店にかかつてきた電話にたまたま俺が出たら、いきなり「この偽善者ヤロー」と怒鳴られて通話を切られたこともあるし、あるときは、ポストに投函されていた紙切れを手にしたら、そこにポールペンで「偽善者！」と書かれていたこともある。中学一年生になつたばかりの頃、クラスで最初に仲良くなつた友人に「お前んち、偽善者の店って言われてるらしいぞ。知ってた？」と言われたときは、さすがにこたえた。

父も景子さん（「従業員」も、「こども飯」というサービスが匿名の人間から批判の対象になつているという事実を俺には知られなくなつたようだけれど、でも、噂は勝手に俺の耳に入ってくるし、目の前で店の電話が鳴れば出てしまふし、新聞を取るついでにポストの中身を手にしてしまう。そもそも俺に隠すなんて無理な話なのだ。

ポストに投函されていた二度目の「偽善者」と出会ってしまったとき、さすがに俺は父と景子さんに訊ねた。

「こども飯、このまま続けて大丈夫なの？」

口にした言葉は質問形式だったが、俺は不平を込めた声のトーンで「もう、やめようよ」と伝えたつもりだった。だって、せっかく世のため人のため、自分を犠牲にしてまで働いているのに、どこの誰かも分からないような奴らから罵られるなんて、あまりにも割りが合わないではないか。

すると景子さんは、いつものように軽やかな微笑みを俺に向けた。

「あ、ええと、矢島先生に、ちょっとお願いがあつて……」

「そうか。おーい、矢島先生」

岡田先生の太い声の呼びかけに、ヤジさんが書類から顔を上げた。そして、すぐに俺の存在に気づいた。

「風間が用事があるそうですよ」

「おう、どうした？ 入っていいぞ」

俺は小さく一礼をして、職員室のなかに入った。そして、ヤジさんの席まで行くと「えっと、シンナーってありますか？」と訊ねた。

「は？ シンナー？」

「はい」

「お前、シンナーなんて、何に使うんだ？」

怪訝そうなヤジさんの顔に、俺は少し慌ててしまった。

「えっ？ 違いますよ。吸うわけじゃなくて——」

「馬鹿。そんなこと、分かてるよ」

ヤジさんは吹き出しながら言った。

「あ……、はい」

「で、何に使うんだ？」

「えっと、じつは——」

それから俺は、机の落書きについて、ありのままにしゃべった。ここでヤジさんに嘘をついても仕方がないし、事実を伝えた方がシンナーを貸してもらえやすくなる確率も高いと思つたのだ。

俺の説明を聞き終えたヤジさんは、眉毛をハの字にしてため息

「心也くんは、気にしなくていいよ。大丈夫だから。ね？」

語尾の「ね？」は、父に向けられたものだった。

それを受けた父は、やっぱり父らしく、厨房でニヤリと悪戯坊主みたいに笑うのだった。

「もちろん大丈夫だ。つーか、匿名でしか文句を言えねえようなチンケな連中に、俺の人生を変えられてたまるかってーの」

そんな感じで大人たちは「大丈夫だ」と言い張った。

でも、「偽善者」という三文字には、ある種の「毒」が含まれていた。「毒」だから、それを浴びせられるたびに、俺の心はじくじくと膿んで痛んだし、しかも、その「毒」は時間とともに薄れはしても、決して消えることがなかった。常に心のどこかに残り続けるのだ。とりわけ今回の落書きの「毒」は強烈だった。なにしろクラスみんなに見られてしまったのだ。これまでのように電話や手紙を使って、こっそり個人的に攻撃されるのはワケが違う。

職員室に向かつて歩きながら、俺は自分の足が地についていないことをはつきりと自覚していた。自分でも思いがけないくらいに動揺しているらしい。

渡り廊下を抜けて、隣の校舎の階段を上った。

職員室の引き戸は開いていた。

なかを覗くと、奥の窓際の席にヤジさんがいて、何かしらの書類に目を通しているようだった。

「おう、風間か、どうした？」

ドアのそばにいた体育の岡田先生が、俺に気づいて声をかけて

をついた。

「偽善者か……。なるほど。まあ、しかし、お前も大変だよな」

なるほど——つて、何だよ？

この瞬間、これまで俺がヤジさんに抱いていた「好感」の絶対量が、一気に半減するのを感じた。

俺は、黙ってヤジさんを見下ろしていた。視線に苛立ちがこもつてしまったかも知れない。でも、ヤジさんは気にする風でもなく、椅子をくるりと回して、こちらに背を向けると、斜め前の席にいた美術の恩田ひとみ先生に声をかけて、ガラス瓶に入ったシンナーを借りてくれた。

「雑巾はないけど、代わりにこれを使っていいぞ」

ヤジさんは机の引き出しからポケットティッシュを取り出すと、シンナーの瓶と一緒にこちらに差し出した。

「ありがとうございます」

あまり心を込めずに軽く頭を下げた俺は、さっさと職員室を後にした。

【心也は教室にもどり、自分の机の落書きを消しました。】

三時間目の国語の授業がはじまってしばらく経つと、窓の外が急に暗くなってきた。見上げた空には黒くて低い雲が、まるで早送りのような速度で流れていた。

「今夜の台風、けっこう強いみたいだね」

板書を終えた国語の藤巻さつき先生が、ちらりと窓の外を見て言った。大学を卒業して二年目という若さと、明るい性格のおかげで、生徒たちから友達のように慕われている先生だ。

「俺、嵐の前って、めっちゃ血が騒ぐんだよな」

後方の席から青井の声が聞こえてきた。誰かが「俺も！」と言ったのを引き金に、教室がざわつきはじめた。

俺は、斜め前の華奢な背中を見た。

夕花は机に覆いかぶさるようにしてノートを取っていた。台風の話にざわつくクラスメイトとは、まったく別の世界にいるような背中だった。

無になろう、存在を消そう、誰にも気づかれないよう、息を止めたままでいよう——、そんな、淋しい静けさを夕花は常にまもっていた。うちの店のカウンター席で幸せそうに「こども飯」を食べているときは、まるで別人のような存在感だ。

ふと、表情のとぼしい幸太（「夕花の弟」）の横顔が脳裏をよぎった。

食べているところをたまたま俺に見られて、やたらと恨めしそうに頬を歪めた石村の顔も思い出す。

偽善者のムスコ——。

毒を孕んだ言葉。その落書き。

思いだしたら、俺の胃のなかで、嫌な熱がとぐろを巻きはじめた。

3 この感じは、やっぱり「怒り」だよな——。

俺は確信した。というか、認めた。

認めたら、なぜか「怒り」の理由が明確になった。

偽善者のムスコ——、このムスコという三文字がやたらと腹立た

しい意味を持つということに気づいたのだ。つまり、俺はただのム

スコであって、偽善者と罵られたのは父だ。

父が、クラスメイトたちの前で吊り上げられたのだ。

俺はゆっくりと息を吸い、そして、嫌な熱を孕んだ息を吐き出した。

低い空を流れてゆく黒雲から、ばらばらと大粒の雨滴が落ちはじめた。

窓から吹き込んでくる蒸し暑い風。

暑いのに、俺の背中にはチリチリと鳥肌が立っていた。

【落書きのことを問いただそうと、心也は隣のクラスの石村を訪ねますが、石村はおらず、かわりに石村の机にも落書きが油性ペンでされているのを見つけました。心也は誰もいなくなる放課後を待って、石村の机の落書きも消すことにしました。】

俺たちは、教室を出た。

そして、こっそりと隣の教室に入り込んだ。

泥棒にでもなったかのような、妙な緊張感を覚えた俺が、ふと

後ろを振り返ると、そこには③マンメンの笑みを浮かべた夕花の顔

があった。

「なんか、わくわくするね、こういうの」

もしかすると、いざというときに度胸があるのって、女子の方なのかも知れない。そんなことを考えながら、俺は石村の机の前に立った。

「えっ、これ……」

予想通り、夕花は息を飲んで俺を見た。

ピンボー野郎

できれば夕花に見せたくなかった言葉。

俺にとつての「偽善者」と似たような「毒」を、夕花に感じさせてしまうかも知れない言葉だった。

でも、俺の心配は、どうやら当てが外れたらしい。

夕花の表情を見る限り、自らの胸を痛める「毒」よりも、むしろ、落書きされた者にたいする同情で胸を痛めているように見えたのだ。

「ここ、石村の席なんだ」

俺は、小声で言った。

「どうして——」

「俺には分からないけど……。とにかく、先生の見回りが来る前に終わらせないよ」

俺は、今朝、自分の机の落書きを消したときのように、まずはテ

イツシュにシンナーを染み込ませた。そして、石村の机の落書きを  
ごしごしとこすった。  
「どうして、心也くんが消すの？」  
その質問が、いちばん答えにくい。  
「俺も、分かんねえ」  
「もしかして、この落書き——」  
「書いたの、俺じゃねえからな」  
夕花には最後まで言わず、言葉をかぶせた。しゃべりながらも、  
俺の手はせわしなく動いていた。  
「俺さ、休み時間にここに来たんだよ。そしたら、こいつの机にも  
落書きがあることに気づいちゃって。だから、まあ、ついでみたい  
な感じかな」  
俺の返事に、夕花は少しも納得していないようだった。

「じゃあ、どうして、放課後にこっそり消すの？」

「だって、みんながいるときに隣のクラスの俺が消しに来たら、ま  
るっきり俺が書いたみたいじゃんか」

「あ、そっか」

「だろ？ よし。消えた」

落書きは、完璧に消えていた。

「うん」

「台風で窓を開けられねえから、シンナーの匂いは残っちゃうかも  
しんねえけど」

「じゃあ、教室の出入り口の引き戸を、ふたつとも少し開けてお

く？」

「それ、いいね」

俺たちは、足音を忍ばせながら教室から出た。その際、引き戸を半開きにしておいて、ついでにもうひとつの引き戸も半開きにした。そして、急いで自分たちの教室へと戻った。それぞれの席の前に立ち、シンナーとティッシュを机の上に置く。

「なんとか誰にも見られずにやり遂げた俺は、「ふう」と息を吐いてから「任務完了」と言っただけを見た。」

「なんか、冒険した気分だね」

わずかに頬を紅潮させた夕花が、両手をこちらに向けて挙げた。

俺はその手に、自分の両手をバチンと合わせた。

ハイタツチだ。

「やったね」

「やったな」

小さく笑い合って、俺たちはそれぞれ自分の椅子に座った。

「ねえ、心也くん」

「ん？」

「先輩（二人は同級生だが、二人の間では冗談で夕花を『先輩』、心也を『部長』と呼ぶことがある）命令を発動させて、いい？」

「は？」

夕花が無邪気な感じで目を細めた。

「ねえ、いい？」

「それは、内容によりけりだよ」

「わたし、やっぱり知りたいんだけど」

「何を？」

「昨日の昼休みに石村くんが来てからのこと」

俺は一瞬、考えた。話しているものか、あるいは、黙っておくべきか。

「わたし、同じ部活の先輩として、ちゃんと知っておきたいから」

「なんだよ、それ」

俺は、軽く吹き出してしまった。夕花もクスツと笑った。二人で笑ったら、張り詰めていた肩の力がするりと抜け落ちたような気がした。まあ、どっちにしろ夕花には、さっきの行動を知られているのだ。ある程度まではしゃべってもいいだろうと思った。

「じゃあ、教えるけど、俺からも部長命令な」

「え、なに？」

「さっき落書きを消したことも含めて、これからしゃべることは、すべて秘密にすること」

「うん、分かった」

頷いた夕花の頬には微笑みの欠片が残っていた。でも、その目は、優等生らしい誠実な光を放っていた。

それから俺は、昨日の昼休みからの一連の出来事をざっくりと話した。ただし、ひとつだけ、夕花にも伝えなかったことがある。それは、石村がうちの店でよく「こども飯」を食べているということだった。つまり、体育館の裏での俺と石村との会話についてだけ嘘をついたのだ。石村は、なぜか落書きの犯人を俺だと勝手に決めつ

けていたので、俺はきっぱり違うと主張した。そうしたら、今朝、俺の机にも落書きがあった、と。

「そっか。そんなことがあったんだね」

夕花は、一応は納得した顔をしていた。

でも、石村の机には「ビンボー野郎」、俺の机には「偽善者のムスコ」と落書きされていたのだ。かしい夕花は、そのふたつの言葉から、俺と石村の関係性がある程度は連想しているに違いない。

「俺からしたら、とんだ濡れ衣だよ」

「濡れ衣を着せられたのに、こっそり落書きを消してあげたんだね」

「……………」

俺は、夕花の言葉にどう返したものか考えた。正直、自分でも、どうして石村の机の落書きを消そうなどと思ったのか、よく分からないのだ。分かることといえば、俺の脳裏にはずっと石村の丸まった背中がちらついて離れないこと――、ただそれだけだ。

「心也くん、やっぱり優しいよね」

「え――」

やっぱり、ということも、もともとそう思ってくれていたということか？

「さすが、うちの部長さん」

「まあ、俺たちはひま部だからな、ひまつぶしにちょうどよかっただろ？」

「俺たち、じゃなくて、心也くん、一人でやろうとしてたじゃん」

「まあ、そうだけど……………」

夕花は、照れている俺を軽くからかっているようにも見えた。

「ねえ、心也くん」

「ん？」

「また、冒険みたいなことをするときには誘ってね」

「は？ するかよ、そんなに」

「えー、そうなの？」

「当たり前だよ」

「なんか残念」

言葉とは裏腹に夕花が小さく笑ったとき、窓ガラスに風雨が叩きつけられた。ザーツという雨滴の音と、窓が揺れるガタガタという音が、静かな教室にまとめて響き渡った。

「あ、台風……」と、俺。

「帰らないとね」と、夕花。

俺たちは頷き合って、急いで席を立った。

校舎を出てからは、横殴りの雨に翻弄され、俺たちは制服のズボンとスカートそれぞれたっぷり濡らしながら、通学路の坂道を降りていった。

突風が吹くと、俺たちは声を出して笑った。

二人とも髪がぐしゃぐしゃになり、傘がひっくり返った。役に立たなくなった傘は、あきらめて閉じて手に持った。

「きゃあ、シャワーみたい」

「さっそく冒険だな」

大きめの声で俺が言うと、夕花は「あはは、ほんとだね」と笑う。

唇をいっばいに左右に引いた、奥歯まで見えるほどの明るい笑み。幼い頃によく見ていた、夕花の本当の笑みだった。

「なんかさ」

「ん？」

「嵐も、悪くねえな」

「うん、嵐、楽しいっ」

不穏な黒い空を見上げながら、思い切り笑っている夕花。そのびしょ濡れの横顔を見ていたら、なぜだか、ふと、泣いているようにも見えて、俺は思わず名前を呼んでいた。

「夕花？」

「ん、なに？」

こつちを向いた夕花は笑っていた。ちゃんと。これまで見たことがないくらい、吹っ切れたような笑みを浮かべていたのだ。

「えっと——、なんか、気持ちいいな」

「うん。最高」

「だよな」

「もうね、なんか、全部がどうでもよくなっちゃいそうなくらい」夕花の前髪と顎の先から、つるつるとしずくがしたたり落ちる。全部がどうでもよくなっちゃいそうなくらい——。

俺は、夕花の言葉を胸のなかで繰り返した。そして、頷いた。

「ほんと、ゼーンぶ、どうでもいいよな」

「あははは」

夕花が笑った。泣いているみたいに目を細めて。

正面から強い風が吹きつけてくる。大粒の雨滴が俺たちの顔をバチバチと叩いた。

「うわ、痛くて」

「ひゃあ」

そして、俺たちは、また笑う。

バケツをひっくり返したようなこの雨が、ビンボーも、偽善者も、きれいさっぱり洗い流してくれればいいのに——。

そう思ったとき、ようやく俺は気づいた。

4 なんだ、泣きたい気分なのって、俺じゃん。

夕花と別れた俺は、びしょ濡れのまま店に入った。

「ただいま」

言いながら店内を見回す。お客は一人もいなかった。さすがにこの天候では仕方がないだろう。よく見れば、すでに奥の客席のテーブルの上に暖簾が置かれている。

「おう、おかえり。いよいよ嵐になって——、つか、なんだ、お前、どうした？」

厨房から顔を覗かせた父が、頭からずぶ濡れの俺を見て吹き出した。

「傘、役に立たなかったから、使わなかった」

「あはは。なるほどな。しかし、ここまでの土砂降りだと、逆にずぶ濡れになるのが気持ちよかったら？」

「うん」と素直に頷いた俺は、あらためて店内を見てから訊いた。

「景子さんは？」

「嵐になる前に帰ってもらったよ。どうせこの台風じゃ、お客も来ねえだろ」

「そっか」父と二人きりになれるのは都合がいい。「じゃあ、俺、ちよつと着替えてくるわ」

「おう、そうしろ」

「あ、俺さ、ちよつと腹減ってるんだけど」

本当は、さほど空腹ではなかったけれど、そう言った。

「そうか。じゃ、何か作つとくから、着替えたら降りてこいよ」

「うん」

「あ、ちなみに、何が食べたい？」

「うーん、麺類がいいかな」

「オツケー」

父が親指を立てたとき、店の窓に強風が吹きつけてガタガタと鳴った。

「心也も帰ってきたし、早々にシャッター降ろしとくか」

そう言って、父は、店の出入り口に向かった。

俺は、厨房の脇にある三和土（「土間」）で、濡れた靴と靴下を脱いで家の上がった。そして、二階の自室に入り、濡れた身体とカバンをタオルでよく拭き、Tシャツとショートパンツに着替えた。

雨で冷やされた身体は、着替えたあと少しひんやりとしていて、憂鬱な心とは裏腹にこざっぱりとしていた。

さてと——、

「ふう」

俺はひとつ息を吐いてから部屋を出た。

階段を降り、三和土でサンダルを履いて厨房へ。そのまま客席へと廻り、調理をしている父と対面するカウンター席に腰掛けた。

ジュウジュウという音を立てながら、父はフライパンを振っていた。

「すぐにできるからな」

「うん」

視線を手元を落として調理しているときの父の顔は、目尻と口元が穏やかで、どこか微笑んでいるようにも見える。

そういえば、俺がまだ夕花と二人で遊んでいた頃——つまり、母が生きていた頃——調理中の父の顔を見て、ストレートに訊いたことがある。「お父さんって、ご飯つくるの、好きなの？」と。すると父は、いつそう目を細めて俺の頭をごしごし撫でながら、こう答えたのだった。「もちろん好きだよ。食べてくれた人が『美味しい』って言うってくれたら、もつともつと好きになっちゃうだろうな」

あの頃よりも、父の目尻のしわは深くなり、髪の毛には白いものが混じるようになった。④ キンコツ隆々としていた身体も、ひとまわり小さくなった気がする。

「あらよつと」

わざと陽気な声を出しながら、父がフライパンの鍋肌に醤油を回しかけた。

食欲をかき立てる、焦げた醤油のいい匂いが立ちのぼる。

思えば、毎日、毎日——、俺は、この人の作ったご飯を食べて育つたんだよな……。

父の尻尻のしわを見ていたら、ふと、そんなことを思った。

「よし、完成だ」

フライパンから皿に盛られたのは焼うどんだった。「こども飯」でリクエストの多い人気の裏メニューだ。

「ほれ」

「ありがと」

厨房から差し出された皿を受け取った。にんにくとバターと醤油の香りのする湯気が立ちのぼり、たつぷりのせた鰹節が生き物のように揺れ動いている。

「いただきます」

「おう」

俺が焼うどんを食べはじめると、父は「さてと」と言っ、厨房の冷蔵庫から瓶ビールを出し、栓を抜いた。そして、グラスも手にして客席に出てきた。

父が座ったのは、俺のいるカウンター席の隣ではなく、背後にある四人席だった。

「くはあ、明るい時間に飲むビールは最高だなあ。台風さままだ」

陽気な父の声を背中で聞きながら、俺はしゃべり出すタイミングを計っていた。すると、思いがけず父の方からそのタイミングをくれたのだった。

「で、心也、お前、俺に何か言いたいことがあるんじゃないかねえのか？」

「え？」

不意をつかれた俺は、手にしていた箸を止めた。

「学校で何かあったのか？」

「……………」

直球で訊かれた俺が言葉を詰まらせていると、父はごくごく喉を鳴らして、明るいままの声で続けた。

「いきなりびしょ濡れで帰ってきて、あんなに深刻な顔してんだもんなあ。しかも、帰ってすぐに腹が減ったなんて言い出すのも珍しいだろ？ さすがの俺でも、何かあったんだらうなって思うぞ」

「別に、深刻な顔なんて——」

言いながら背後を振り向いたら、

「してた、してた」

と父はからかうように笑う。

俺、そんなに深刻な顔をしたのか——。

正直、自分としては心外だったけれど、そういえば、景子さんに言われたことがあった。学校から帰ってきたときの俺の顔を、毎日、父は観察しているのだと。

「まあ、別に、深刻ってほどのことじゃないんだけど」

俺は、後ろを振り返ったまま言った。

「そうか。それなら、それでいいけどな」

父はグラスをテーブルに置き、コッソ、という乾いた音を店内に響かせた。

チ、チ、チ、チ、チ……。

と、焼うどんを見ながら言った。

「おう」

「うちの『こども飯』のことなんだけど」

「……………」

背後の父は返事をしなかった。でも、ちゃんと耳を傾けてくれる気配は感じられた。

「そろそろ、やめない？」

ああ、言っちゃったな——、そう思いながら焼うどんを頬張ったら、なんだか少しだけ味がぼやけた気がした。

父は、少しのあいだ何も答えなかった。しかし、ふたたび店のシヤッターがガタガタと音を立てたとき、いつもと変わらず野太くて、でも、いつもより少し穏やかな声で言った。

「学校で、何か言われたのか？」

俺の脳裏に、あの汚い落書きの文字がちらついた。

「別に、言われたわけじゃないけど」

嘘はついていない。言われたのではなくて、書かれたのだ。俺は心のなかで自分自身に屁理屈を言っていた。すると、

「くくくく」

と、父が笑い出した。

「なに？」

俺は箸を手にしたまま、思わず後ろを振り向いた。

「ほんとお前って、昔から嘘が下手なのな」

「は？ 嘘なんて——」

客席の壁かけ時計が秒針の音を漂わせ、窓の隙間からは雨音が忍び込んでくる。  
母がいなくなってから、この家に一気に増えた静けさ。父が陽気な人だからこそ、ふと黙った瞬間の静けさがいっそう深く感じられるのだと思う。

外で突風が吹いて、店のシヤッターがガタガタと大きな音を立てた。

「心也」

父が俺の名を呼んだ。いつもと変わらぬ、野太くて明るい声色で。

「え？」

「とりあえず、うどん、あったかいうちに食べちゃえよ」

「あ、うん」

俺はカウンターに向き直り、止めていた箸を動かした。そして、食べながらふと気づいた。

父は、わざと俺の後ろの席に座ってくれたのだ。

少しでも俺がしゃべりやすくなるように。

「うめえか？」

「うん」

それからしばらく父は黙ってビールを飲んでた。

俺も黙々と箸を動かした。

そして、半分くらい食べたとき、なんとなく自然な感じで俺の口が動いてくれたのだった。

「あのさ」

「まあ、いいけどよ」父は美味そうにビールをごくごく飲んで、「ちよっと想像してみろよ」と言った。

「想像？」

「ああ、『ごども飯』をやめた俺と、その後の食堂をイメージしてみろって」

「……………」

「しかも、自分から進んでやめたんじゃないなくて、どこぞの部外者の言葉に屈して『ごども飯』サービスをあきらめた俺と、子どもたちが来なくなったこの食堂と、そうなった店に学校から帰ってくる自分のこともな」

想像をしかけて、すぐにやめた。まじめに想像をするまでもない。というか、すでに胃のあたりが重くなっていたのだ。

俺が、何も答えられずにいると、ふいに父はやわらかい目をした。

「なあ心也、死んだ母ちゃんは賢かっただろ？」

「え？」

「その母ちゃんが、言ってたんだ」

「……………」

「人の幸せってのは、学歴や収入で決まるんじゃないで、むしろ『自分の意思で判断しながら生きていくかどうか』に左右されるんだって」

「……………」

「あ、お前、その目は疑ってるな？」

「いや、べつに」

思だ

咀嚼した（「よく噛んだ」焼うどんを飲み込んだ。

店内がふたたび静かになって、時計の秒針と雨の音がやけに大きく聞こえはじめた。

なんだよ。マジかよ。やめるのかよ。

俺に、胃が重くなるような未来を想像させておいて、やめるのかよ——。

そもそも自分からやめて欲しいと言ったのに、いざ父が賛成してくれたら、それにも不平を言いたくなって、胸の奥のもやもやがむしろ一気に膨張してきた。正直、少し息苦しいほどだった。それでも、俺は、焼うどんを頬張った。そして、いつもよりしつかりと噛んだ。背中に父の存在を感じると鼻の奥がツンとしてきそうだったから、必死に噛むことに集中したのだ。

やがて、静かすぎる店のなかで、俺は焼うどんを完食した。

皿の上にそっと箸を置き、背中越しに言った。

「ごちそうさまでした」

少し、声がかすれてしまった。

「おう、美味かったか？」

母がいなくなってから、何度も、何度も、父と俺のあいだで交わされてきた短い言葉のやりとり。

ちよっと腹が立つから、今日くらいはイレギュラーな返事にしてやれ、と俺は思った。

「5」まずかった」

「いまのは俺の言葉じゃなくて、本当に母ちゃんの言葉だからな。しかも、国連だか何だかがちゃんと調べたデータらしいぞ」

「分かったよ、それは」

「よし。てなわけで、死んだ母ちゃんの教えどおり、俺は自分の意思を尊重しながら生きる。やりたいようにやる」

父はニヤリと笑って、ビールをあおった。

「……………」

なるほど、やっぱり俺の意見は流されるってことか。

そう思ったなら、言葉にならないもやもやが胸のなかで膨らみはじめた。俺はふたたび父に背中を向けた。そして、黙って焼うどんを口に運んだ。少し冷めてしまった麺は、さっきよりも粘ついていて、風味も落ちた気がした。それでも、かまわず食べ続けた。

すると、背後で、また、コツン、という乾いた音がした。

父がビールのグラスを置いたのだ。

「ちなみに、だけどな」

穏やかな父の声を、俺は背中では撥ね返そうとして無視をした。でも、父はかまわず言葉を続けた。

「心也が不幸になると、自動的に俺も不幸になっちゃう」

「……………」

「だから、心也が不幸になるんだったら、俺は『ごども飯』をやめるよ」

「……………」

「それが、やりたいようにやると決めている俺が、自分で決めた意

ぽつりと言ったら、背後で父が吹き出した。

「あはははは。心也、お前なあ——」

「……………」

「ほんと、死んだ母ちゃんによく似てるわ」

俺はあえて振り返らずに、空になった皿を見下ろしていた。

すると父が、ますます愉快そうに続けた。

「母ちゃんも、お前も、嘘をつくのが下手すぎなんだよなあ」

その言葉に肩の力が抜けて、フツと笑いそうになった瞬間、なぜか同時に鼻の奥が熱くなってしまっ……、それから俺は、しばらくのあいだ後ろを振り向けなかった。

問一 —— 部①～④のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 —— 部1「さすがにこたえた」とありますが、それはなぜですか。四十五字以上、六十字以内で説明しなさい。

問三 —— 部2「なるほど——って、何だよ？」とありますが、この時の心也の気持ちを、二十五字以上、四十字以内で説明しなさい。

問四 — 部3「この感じは、やっぱり『怒り』だよな——」とありますが、心也はどのようなことに怒りを感じたのですか。三十五字以上、五十字以内で自分の言葉で説明しなさい。

問五 — 部4「なんだ、泣きたい気分なのって、俺じゃん」とありますが、この時の心也の気持ち、五十字以上、六十五字以内で説明しなさい。

問六 — 部5「まずかった」とありますが、この時の心也の気持ちを、六十字以上、七十五字以内で説明しなさい。

★問二〜六は、句読点や記号も一字として数えます。

このページより後ろは白紙です。



A  
国  
語

22

解答用紙

問六	問五	問四	問三	問二	問一
60	65	35	40	60	③
75	50	50	25	45	④
				①	
				②	

受験番号
氏名